京都市内遺跡発掘調査概報

平成７年度

京 都 市 文 化 市 民 局

序

山紫水明の恵まれたまち京都は，今，永い歴史の積み重ねを経て，平安京遷都1200年より21世紀に向かっての歴史の大きな節目の中にあります。

この文化豊かな京都のまちの埋蔵文化財は，先史時代より時代ごとに積み重ねられた複合した遺跡の中にあり，それらは当時の文化や生活様式を明らかにするもので，わが国の歴史や文化の発展を知ることが出来る貴重な国民共有の財産であると認識を致しております。

バブル経済の崩壊後，一旦，土木工事等の開発件数は減少したものの，近年また増加の傾向にあります。各種開発に伴う土木工事につきましては事前に発掘調査・立会調査・試掘調査などの調査を実施し，保存の措置が図れる場合は遺跡を保護し，そうでない場合は記録による保存を行っております。そしてこれらの調査で得られた貴重な歴史資料を後世に伝え，活用してゆく責務があると考えております。

本書は，京都市が文化庁の国庫補助を得て平成７年度に実施した埋蔵文化財調査の概要報告書であります。

発掘調査及び立会調査につきましては，財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託したものであり，試掘調査につきましては京都市埋蔵文化財調査センターが実施したものであります。

最後になりましたが，各調査にご理解とご協力をいただきました市民の皆様及びご指導とご助言をいただきました関係者の方々に心よりお礼を申し上げますと共に，本書が京都の歴史を知るための資料としてお役立ていただければ幸甚に存じます。

平成８年３月

京都市文化市民局

局　長　山　田　富　男

例　　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した、文化庁国庫補助事業による平成７年度の京都市内遺跡（北白川廃寺塔跡）発掘調査概要報告である。

2　調査地は、京都市左京区北白川東瀬ノ内町50-１番地である。

3　調査は、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４地区に分けて実施し、Ａ・Ｄ区を吉村正親が、Ｂ・Ｃ区を伊藤潔が担当した。

4　本書の執筆は、吉村が行い、一部を伊藤が担当した。

5　整理作業および本書の作成には、上記執筆者の他に以下の者が参加した。
北川和子、近藤章子、端　美和子、尾藤徳行、宮下則子、本　弥八郎、竜子正彦

6　写真撮影は、村井伸也、幸明綾子が担当し、遺跡の一部は調査担当者が行った。

7　本書で用いた土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書で使用した遺構の略記号は、奈良国立文化財研究所の用例に従った。

9　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用し、調査における測量基準点の設置は、辻純一、宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）による。

10　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の京都市都市計画図（縮尺：１／10,000）を複製して調整したものである。

本 文 目 次

北白川廃寺塔跡

I　調査経過 …… 1

II　遺跡の環境と調査の経緯 …… 1

III　遺　構 …… 4

1　A　区 …… 4

2　B　区 …… 5

3　C　区 …… 5

4　D　区 …… 5

（1）　石積基壇 …… 6

（2）　塔心礎部 …… 6

（3）　基壇版築 …… 7

（4）　石組階段 …… 7

（5）　瓦積基壇 …… 7

（6）　側　　柱 …… 7

（7）　下層遺構 …… 8

IV　遺　物 …… 8

1　土器類 …… 8

2　瓦　類 …… 9

V　ま　と　め …… 12

表　目　次

報告書抄録 …… 14

図 版 目 次

図版１　遺構　調査区配置図
図版２　遺構　Ａ区北平面・断面図，Ａ区南・Ｂ区・Ｃ区断面図
図版３　遺構　Ｄ区平面図
図版４　遺構　塔心礎据付け穴平面・断面図，No.１～４トレンチ断面図
図版５　遺構　基壇南北断割り・No.５トレンチ断面図
図版６　遺構　基壇南側階段平面・立面図
図版７　遺構　基壇北・西側平面・立面図
図版８　遺物　軒丸瓦拓影・実測図
図版９　遺物　軒丸・軒平瓦拓影・実測図
図版10　遺物　平瓦拓影図
図版11　遺物　平瓦・塼拓影図
図版12　遺構　Ａ区　１　調査区全景
　　２　土壙ＳＫ１
図版13　遺構　Ｂ区　１　調査区全景
　　２　東壁断面
図版14　遺構　Ｃ区　１　調査区全景
　　２　南壁断面
図版15　遺構　Ｄ区　１　調査区全景
　　２　石積基壇
図版16　遺構　Ｄ区　１　基壇南側階段
　　２　基壇南側階段西脇
図版17　遺構　Ｄ区　１　基壇北側階段
　　２　基壇北側階段西脇　鬼瓦出土状況
図版18　遺構　Ｄ区　１　塔心礎据付け穴
　　２　塔心礎部南北断割り断面
図版19　遺構　Ｄ区　１　基壇北側　石積と瓦積
　　２　基壇中央部南北断割り断面
図版20　遺構　Ｄ区　１　塔心礎部北側断割り断面
　　２　塔心礎部南側断割り断面
図版21　遺構　Ｄ区　１　No.１トレンチ東壁断面
　　２　No.４トレンチ南壁断面

図版22　遺構　D区　1　基壇南側東端
　　2　基壇北側西端
図版23　遺構　D区　1　基壇西側　石積と瓦積
　　2　基壇南側　裏込め
図版24　遺構　D区　1　基壇断面剝ぎ取り作業風景
　　2　遺構保護作業風景
図版25　遺物　軒丸瓦　A区　土壙ＳＫ１，D区　基壇外西側瓦層，基壇南側階段西脇，
　　丸（文字）瓦　A区　ＳＫ１
図版26　遺物　軒平瓦　A区　土壙ＳＫ２，D区　基壇外北側瓦層，基壇外西側瓦層
図版27　遺物　軒丸瓦　A区　土壙ＳＫ２，鬼瓦　D区　基壇北側階段西脇，
　　鴟尾　D区　基壇版築

挿　図　目　次

図１　調査地周辺遺跡位置図……2
図２　主要遺構配置図……3
図３　遺物実測図……9
図４　瓦拓影・実測図……11

北白川廃寺塔跡

Ⅰ　調査経過

調査地は、京都市左京区北白川東瀬ノ内町50-1番地で、過去の発掘調査[註1]で北白川廃寺の塔基壇が確認されている土地である。この塔基壇跡が存在する場所において、土地所有者から京都市埋蔵文化財調査センターに建物建設並びに駐車場整備を行う計画が提出されたことから、センターは事前に遺構の範囲確認と保存を目的とした国庫補助発掘調査を指導し、その調査を当研究所が受託し実施したものである。

今回の調査目的は、塔基壇および周囲の遺構の有無を解明することは勿論ではあるが、前回の調査で確認し得なかった地下心礎の有無、基壇化粧の細部、塔北側と西側の階段の有無などを解明する課題もあった。

調査前に現地での打合せを1995年４月26日に行い、発掘調査中の駐車スペースを確保する必要から、工事工程に合わせて、調査地をＡ～Ｄ区の４地区に分けて順次調査を行うこととし、樹木の移植作業、調査地の復旧方法などの調整も行った。また、現道路に面して道路より一段高くなっているＡ～Ｃ区については、工事掘削の深さが道路面以下におよばないため、調査による掘削もその深さでとどめた。しかし、下層遺構を確認する必要性から、土地所有者の承諾を得て、Ａ区の西壁沿い、Ｂ区の東壁沿い、Ｃ区の南壁沿いの一部を地山まで掘り下げて調査を行った。Ｄ区については、遺構の保護処置をしたうえで土壌改良剤を加えて埋め戻しを行った。

各調査区の調査期間は、Ａ区は５月10～19日、Ｂ区は６月14～17日、Ｃ区は７月11～20日、Ｄ区は８月17日～９月19日で、最終的な現場の撤収は９月20日である。

Ⅱ　遺跡の環境と調査の経緯

北白川廃寺は、賀茂川と高野川の合流点から東北東約1.9kmにあって、北東に比叡山、瓜生山、南に吉田山の小丘陵を望むところにあり、白川により形成された白川扇状地上に位置する。

この扇状地は、北は北白川一帯から南は岡崎・聖護院にかけての白川の流域に沿って広がっており、主に白川の風化花崗岩の砂や礫からなる。扇状地は、永年の白川の流路の変動によって六つに分岐[註2]していることが知られ、そのなかの、北端に位置するのが瀬ノ内町扇状地とその南の小倉町扇状地である。今回調査を行った北白川廃寺は、瀬ノ内町扇状地の扇頂部近くに建てられていた。両扇状地の間にはかつて流路が存在した時期があり、その堆積土層中からは、縄文時代の遺構や遺物が発見されている。

北白川一帯から南の岡崎にかけての地域には、縄文時代から弥生時代にかけての遺跡が点在することが以前よりよく知られている。

調査地周辺の遺跡としては、北には縄文時代の沖殿町遺跡、一乗寺向畑町遺跡、奈良から平安

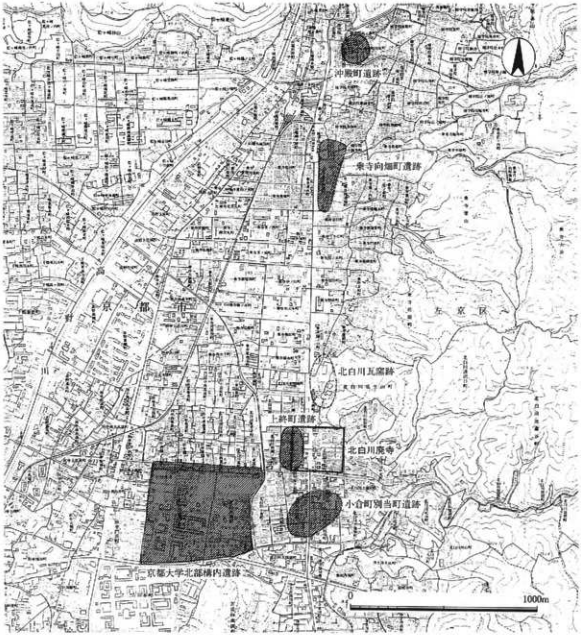


図1　調査地周辺遺跡位置図（1：20,000）

時代の北白川瓦窯跡、南には縄文時代の京都大学北部構内遺跡、小倉町別当町遺跡があり、北白川廃寺の西辺と遺跡範囲が一部重複する縄文時代の上終町遺跡がある。

北白川廃寺は、1934（昭和9）年、この地域一帯に区画整理が施工され、その工事中に発見されたもので、寺院名や沿革が不詳であることから、地名をとって北白川廃寺と呼ばれるにいたった。このときに縄文時代の遺跡群も発見され、緊急調査が行われている。

その当時の主な調査場所は2箇所あり、一方は、白川通と御陵通との交差点北東部で、南面する大規模な瓦積基壇（東方堂宇）を検出した。もう一方は、今回の調査地付近の道路部分で、1条の溝、礎石、瓦類など寺に関係する遺構、遺物を検出しているが、基壇跡は発見されていない。

この二つの地区で検出された遺構、遺物の関係については、同一寺院跡とするには距離があまりにも離れていたため、当時は別の寺院が存在すると考え、東側で発見した基壇は「東方堂宇」、

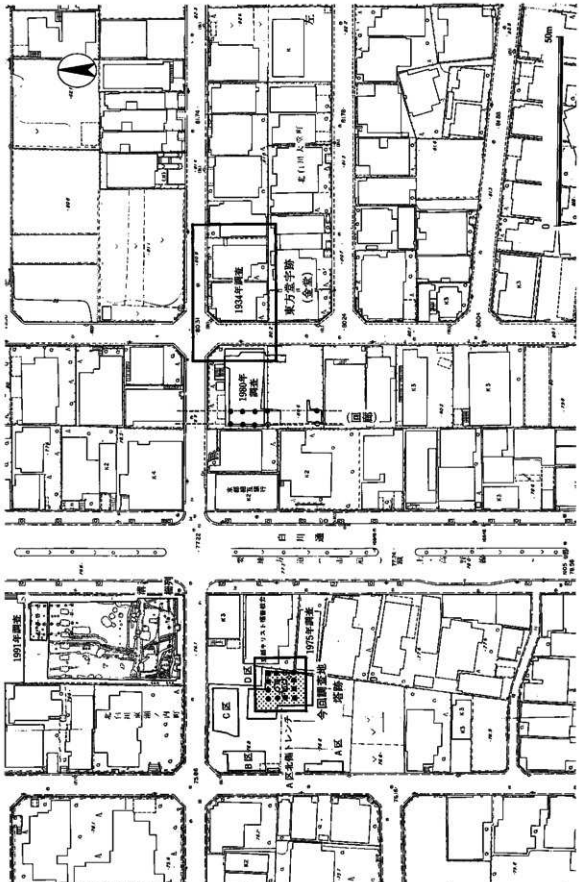


図2　主要遺構配置図（1：1,000）

西側を「西部区域」とした。

調査地周辺は畑地の残る静かな住宅地であったが、その後急速に開発が進み、畑地の大半が宅地や駐車場となった。

1974（昭和49）年になり、今回の調査地内（A区東側）で、建築業者がゴミ投棄穴を掘削したあとに、その穴の中や周辺に多量の瓦が散乱していた。それを近くに居住しておられた故小林行雄氏（京都大学）らがみつけ、同氏から京都市へ北白川廃寺に関係する遺構があるのではとの通報があり、それを受けて京都市文化観光局文化財保護課が緊急発掘調査[注4]を実施し、溝と瓦堆積層を検出した。

1975年、当地の東隣（D区東側）、白川通に面する内科医師宅の敷地で、三上貞二氏が発掘調査[注5]を行い、瓦積基壇（第一次基壇）と石積基壇（第二次基壇）が重複する基壇の東南角を検出するにいたった。同年、文化財保護課の梶川敏夫氏が、前回発見した基壇のすぐ西側（D区）で発掘調査を行い、基壇が方形を呈する塔跡であることをはじめて明らかにした。

1980年、東方堂宇地域で、建設工事に伴う発掘調査[注6]を当研究所が行い、東方堂宇の基壇とその西側に南北回廊を検出した。

1990年、塔跡の北東20mの地点で、建設工事に伴う発掘調査[注7]を当研究所が行った。検出した北白川廃寺関係の遺構には、南北棟建物2棟、掘立柱塀2列、東西溝2条、土壙1基がある。その中で、二時期の掘立柱塀とそれに伴う東西溝は塔の北を限る施設と考えられ、寺域復原の貴重な資料となった。

1995年、塔跡の西方で行った立会調査[注8]では、上部に瓦を含む土層が堆積する南北方向の溝状遺構を検出している。これは寺域西限に関連する遺構の可能性も考えられる。

Ⅲ　遺　構

調査区は、基壇の西外側に2箇所、北外側に1箇所、基壇位置に1箇所を設定した。

調査地全体は現在、西と北にある道路面より一段高くなっており、A～C区はその道路に面し、基壇のあるD区はA～C区に囲まれる配置である。なお、D区の調査範囲のなかには、1975年に文化財保護課が設定した調査区も一部含まれる。

また、A～C区は部分的に断割りを行い、D区は部分的な下層遺構の確認調査を行った。

1　A区（図版2・12）

敷地の南西部で南北に2箇所（A区南・A区北）の調査区を設定した。

A区南は南北17m、幅2mで、後に一部拡張を行った。A区北はA区南の北7mで、南北3m、幅0.7mである。

A区南の遺構検出面は、盛土下約0.2mの黒褐色（5YR2/1）泥砂層上面である。検出した遺構は、南半部で互いに切り合う土壙2基（SK1・2）と溝1条（SD3）である。A区北では版築状土層を検出した。

土壙SK1　南北3.5m、東西2.6m以上、深さ約0.3mの瓦溜で、一部は調査区東側に延びる。

埋土は黒褐色泥砂で、完形の瓦や文字瓦を含む多量の瓦類が出土した。瓦類は白鳳期のものが大半で、他に鉄釘、土器類も出土した。

土壙ＳＫ２　土壙ＳＫ１の下層で検出した。南北1.6m、東西2.2m以上、深さ0.4m、埋土は黒褐色泥砂である。ＳＫ１の一部である可能性もあるが、遺物の出土状況、内容から判断して、別遺構として扱った。土器類、瓦類が出土した。

溝ＳＤ３　ＳＫ１・２の下層で検出した東西溝で、幅3.4m、深さ0.5m、底部はほぼ平坦である。埋土は極暗赤褐色砂泥で、最下層から７世紀後半の須恵器が出土したが、瓦類は出土していない。

版築状土層　現道路面と同じ高さで、黒褐色砂泥を含む厚さ２～５cmの白色粗砂層と黄色粗砂層の厚さ30cmの互層堆積を検出した。土層は固く締まっており、版築による地業跡と考えられる。土層内から遺物は出土していない。　（吉村）

２　Ｂ区（図版２・13）

Ａ区の北側にあり、規模は東西5.5m、南北10mである。

調査区の東壁部以西は現道路直上まで攪乱、盛土層で、その下層の黒褐色（10ＹＲ3/1）泥砂層上面で遺構検出を行い、東西溝ＳＤ４を検出した。また、下層遺構の有無を確認するため、東壁沿いに幅0.5mの断割りを行った。その結果、平安時代後期の土師器と多量の瓦を含む黒褐色泥砂の整地層が約0.2m堆積しており、下面で溝状遺構ＳＸ５を検出した。

溝ＳＤ４　調査区北端で幅1.1m、深さ0.2mの東西溝を検出した。埋土の暗褐色泥砂より瓦と平安時代の土師器が少量出土した。

溝状遺構ＳＸ５　断割り部の黒褐色泥砂層下面で検出した幅4.5m、深さ0.7mの東西方向に延びる溝状遺構である。埋土は赤黒色泥砂で上層からは瓦が出土したが、下層からは瓦類の出土はなく、７世紀の土師器、須恵器が少量出土した。　（伊藤）

３　Ｃ区（図版２・14）

北側道路に面する調査区で、規模は東西16m、南北７mである。

遺構の残存状況はＢ区と同様で、暗褐色泥砂層の上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されなかった。そのため、南壁沿いに幅0.5mの規模で地山まで断割りを行ったところ、東半部では瓦を多量に含む整地層があり、瓦は地山直上層まで含まれ、整地層下部から三彩陶器獣足片が１点出土した。西半部では整地層の下面で溝状遺構ＳＸ６を検出した。

溝状遺構ＳＸ６　整地層下面で検出した幅3.7m、深さ0.7mの溝状遺構で、南北方向に延びる。埋土は黒褐色泥砂で、下層からは７世紀の土師器、須恵器が少量出土した。　（伊藤）

４　Ｄ区（図版３～７・15～24）

調査区の設定は、1975年の調査区を基準に塔心礎部を中心にできるだけ基壇部を多く検出できるように考慮した。また、基壇外の状況を把握するために西と北に約1.8mの幅をもたせた。規模は最大で東西12.5m、南北17mである。なお、基壇の調査が終了した後、基壇中央を南北に断割り、また、基壇外の下層遺構確認のために基壇西と北に５箇所のトレンチを設定した。

基壇部の基本層序は、アスファルト、盛土が約30cm、近世以降の耕作土が15cmあり、以下が基壇の版築土層となる。

基壇外の基本層序は、耕作土以下に廃棄された多量の瓦と12～13世紀の少量の土師器皿を含む厚さ60cmの基壇外瓦層（図版5-23・24・26層）、さらに褐色泥砂層（28層）が18cmあり、その下面が塔創建時の地表面となる。以下の土層は場所によって異なるが、基壇築造時に混入した瓦を含む堆積層がある。

（1） 石積基壇

基壇の南・西・北の3方で石積を検出した。石積の方法はいわゆる乱石積で、使用場所により石の大きさ、積み方が異なる。なお、この石積は元の瓦積基壇の上部に積み上げた改築のための石積基壇である。

石材は花崗岩、砂岩、変成岩などの自然石を使用しており、長辺は約20～100cmのものがある。比較的大きな石材は花崗岩で、いずれも風化がかなり進んでいる。

基壇南側　石積は東西約8mを確認した。これは1975年に検出している階段部分を含んでいる。残存していたのは基底部の石の1段のみで、石の長辺を横に据える。階段が取付く位置には、50cm前後の小さめの石を使用している。石の底面は、西に向け緩やかに低くなっており、東端と西端との高低差は約30cmある。基壇西端の石組は崩れ、外側に少し張り出している。

基壇北側　石積は基壇北西角から東へ6.1mを確認した。基壇北西角には長辺が80cmの花崗岩を据え、それから階段取付き部までは、長辺20～40cmの石を基底部として積み上げ、検出したのは3段（約60cm）である。階段の取付き部には長辺約50cmの石が使われている。

基底部からは9世紀前半の須恵器が出土しており、改築時期を推定する資料となった。

基壇西側　石積は基壇北西角から南へ5.9mを確認した。石の長辺は30cm前後から最大60cmである。石積は2段から4段が残り、高さは最大で63cmある。積み方は、基壇北西角から南3.7mの間は大きな石を縦にして並べ、それより南は小さな石をやや雑に横積にしている。石積の面には凹凸がみられる。

（2） 塔心礎部

塔心礎部は、1975年の調査で一部掘られているが、塔心礎が地上式か地下式かが確認されていないため、今回はその確認を中心に調査を行った。その結果、塔心礎は地上式であることが明らかになった。

塔心礎の据付け穴は、東西約3.5m、南北約3.2m、深さ0.5mの円形である。埋土は数層に分層できるが、据付け穴には版築土層は認められず、径30～60cmの自然石が散乱していた。そのなかの径60cm前後の石3個は、根固め石として原位置を保っていると思われる。

なお、地上式心礎の下に地下式心礎が存在する可能性もあることから、ボーリングステッキでの探査と、深さ1.3mの断割りを行った。その結果、版築土の下層は縄文時代の遺物を包含する暗褐色泥砂層と、にぶい黄褐色泥砂層が水平に堆積し、土層断面にも塔心礎を据えた痕跡が認められず、最終的に地下式心礎はないと判断した。

（3） 基壇版築

基壇の南北幅は、石積の両外側面から測ると14ｍで、基底部からの石積の高さは0.6ｍ前後である。

基壇中央の断割り断面では、中央部10.6ｍの間の版築土はほぼ水平に堆積しているが、北端と南端は中央部とは異なり、基壇上部から外斜め下方に堆積する土層が認められる。そのほか基壇上面の観察でも、石積の面から内側２ｍ前後の幅で土質が中央部と異なり、基壇の西方も南北と同様の地業が行われている。この版築土層は基底部の石の下、基壇の外にまでおよぶ。

基壇中央部の版築土全体の厚さは40～55cmで、厚さ２～10cmの黄褐色系と黒褐色系の泥砂の互層で、版築土以下は自然堆積である。版築土層は基壇南辺では粗く、塔心礎廻りと基壇北辺にかけては比較的密で整っている。版築は、大部分は南から北へと順に土を積んで造られている。版築土層からは須恵器、瓦、鴟尾が出土した。

（4） 石組階段

南側階段　１段目の蹴込み石と踏み石が残る。階段の出は約1.2ｍで、わずかに外に開く。幅は東側面の石がなく不明であるが、基壇南北中軸線から折り返して約４ｍと推定できる。使用石材は基壇と同じく20～60cmの自然石で、西側面、前面の端には大きな花崗岩を使う。

階段前面の蹴込み石は、長辺を横に据える。なお、西側面の石の0.6ｍ内側に別の石が据えられていることから、後に階段を拡幅したことが考えられ、その場合、当初の幅は2.8ｍと推定される。

北側階段　蹴込み石２段と１段目の踏み石の一部が残る。階段の出は1.3ｍ。幅は東側が調査区外となるため不明であるが、基壇北西角から西側面の石までが5.1ｍあり、基壇南北中軸線で折り返すと3.8ｍと推定される。西側面の石は、長辺80cmと40cmの花崗岩２個を横にやや外に開く形に据える。

なお、２段分の蹴込み石の幅を階段の出幅に割り付けると、基壇の石積を加え４段であったと推定できる。

（5） 瓦積基壇

石積の基底部の石の下面から検出した。瓦積基壇の一辺は、基壇南辺と北辺の基底部丸瓦の側面で13.8ｍとなる。

構築方法は、行基式丸瓦を横一列に組み込んで基底部とし、その上に半截した平瓦を平積みにする。基底部の丸瓦は、先の基壇上面から外下方に延びる版築土層を幅30～40cm掘り込んだ上に据える。しかし、基壇が確認されている西端では、丸瓦の下に細長い自然石を使用している部分がある。瓦積が最も高く残るところは35cmで、その上に石積の基底石が重なる。

なお、遺跡保存のうえから瓦積基壇の検出は部分的な確認にとどめた。

（6） 側　　柱

塔心礎部の周囲に方形にめぐる浅い窪みを11箇所で確認した。四隅の窪みは径90cm前後とやや大きく、他は70cm前後である。これを側柱の礎石据付け跡とすると、柱間隔が約2.2ｍ、一辺が約

6.5～6.8mとなる。

側柱と心礎の間に本来あるべき四天柱の据付け跡は確認できなかった。

(7) 下層遺構

基壇版築土層の下層に、厚さ約25cmの縄文時代後期の暗褐色泥砂層（遺物包含層）を検出し、その下層には約60cmのにぶい黄褐色泥砂層、さらに10cm以上の黒褐色泥砂層があり、いずれも水平に堆積する。下部2層からは今回遺物は確認できなかったが、無遺物層とは断定できない。

基壇外に設定した5箇所のトレンチの堆積層は、上層部が、基壇上面から基壇外に斜め下方に延びる土層につながり、下層部は、基壇築造前の堆積であり、No.1～3トレンチは湿地状堆積で、No.4・5トレンチでは溝内堆積である。これらは、7世紀の遺物が出土したA区・SD3、B区・SX5、C区・SX6につながると考えられる。（吉村）

Ⅳ 遺 物

1 土器類（図3）

縄文土器（1～3） いずれも縄文時代後期の小片である。（1）は、無文でナデ調整がみられる。A区SD3より出土。（2）は、沈線文の入る深鉢の口縁部で、色調は暗褐色、（3）は、沈線文と条線文の入る深鉢の口縁部。いずれもD区版築土層下の暗褐色泥砂層より出土。

須恵器蓋（4） 口縁部の小片。胎土は堅緻。A区SK2より出土。

土師器椀（5） 器壁は厚く、口縁は内湾気味に立ち上がり、底部外面に粗いハケメが付く。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用。胎土は粗く、淡黄褐色。口径10.6cm。A区SK2より出土。

須恵器杯（6） 底部はヘラオコシの後ナデ。口縁部は直線的に外上方にのびる。胎土は緻密で硬質、淡灰色。口径10.8cm、器高3.0cm。A区SD3より出土。

土師器杯（7） 底部外面はヘラケズリで、口縁部を強くヨコナデし端部を内側に肥厚させる。内面に細く密な放射状暗文を施す。胎土は緻密で軟質、黄褐色。口径15.2cm、器高3.3cm。A区SD3より出土。

土師器甕（8） 口縁部は「く」字に屈曲する。体部内・外面はタテ方向、口縁部外面は右下り、内面は横方向のハケメ調整。胎土は砂を含み軟質、黄褐色。口径21.4cm。B区SX5より出土。

須恵器杯身（9） 底部はヘラオコシで未調整。胎土は緻密で硬質、灰白色。C区南壁断面整地層より出土。

須恵器杯（10） 小片。外面に成形時の条痕が明瞭に残る。胎土は精良で硬質、暗灰色。D区塔心礎据付け穴より出土。

須恵器小壺(11) 磨滅した破片。底部に糸切り痕あり。胎土は多孔質で軟質、黄白色。D区基壇南側階段西脇より出土。9世紀中頃。

土師器皿（12） 完形。底部外面は指オサエ、口縁は短く直線的に立ち上がる。口縁部に煤が付

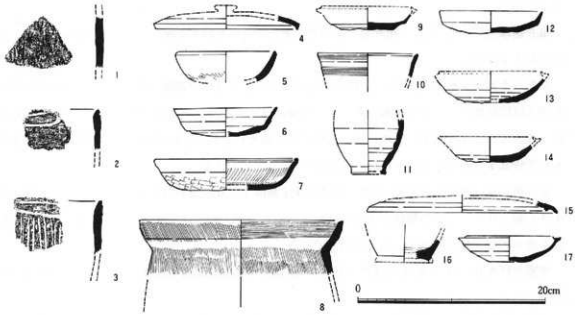


図3　遺物実測図（1：4）

着しており、灯明皿として使用。胎土は精良でやや軟質、赤褐色。口径10.8cm、器高2.3cm。D区基壇外北側瓦層より出土。9世紀中頃。

須恵器杯身（13・14）　いずれも底部のみで、ヘラオコシ。内面は回転ナデ仕上げ。胎土は緻密で硬質、暗灰色。D区No.1トレンチ下層部より出土。

須恵器蓋（15）　口縁部の小片。胎土は精良でやや軟質、灰白色。C区南壁断面整地層より出土。

灰釉陶器小壺（16）　小片。内底部に釉が付着。胎土は粗くやや軟質、灰褐色。D区石積基壇下部より出土。9世紀前半。

須恵器杯身（17）　器壁は薄く、口縁端部を鋭く作る。胎土は精良で硬質、暗灰色。口径10.8cm、器高2.8cm。D区基壇版築土層より出土。

2　瓦　類　（図版8～11・25～27、図4）

重弁蓮華文軒丸瓦（18）　花弁は肉厚でよく整っている。二重の界線と外縁に重圏文がめぐる。山田寺式の軒丸瓦である。山田寺出土の瓦と比べて文様はさほど崩れていない。A区SK1より出土。

重弁八葉蓮華文軒丸瓦（19）　全体に磨滅し、中房の蓮子の数は不明。蓮弁の形状は祖型をよく保つ。界線は一重で外縁部の重圏文の上に珠文を配する。胎土は多孔質で軟質、青白灰色。A区SK1より出土。型式的には（18）の次の段階に入る。

重弁六葉蓮華文軒丸瓦（20）　丸瓦部、瓦当部がほぼ完全に残る。中房に四角形の釘貫文が付き、弁間に珠文を配する。瓦当部の接合は、瓦当部裏面に溝を作り丸瓦を差し込み、周囲を粘土で補強する。類例の中には、瓦当部と丸瓦部が歪んで付いているものがある。丸瓦部は玉縁のない行基式で、凸面に縦方向のヘラミガキを全面に施す。胎土は砂質で硬質、暗赤褐色。A区SK

2より出土。

重弁蓮華文軒丸瓦（21）　花弁を三重の線で表し、長い弁間文を配する。胎土は堅緻、灰色。A区SK1より出土。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦（22）　中房の蓮子は1＋6。花弁の外郭線は太く明瞭で、先端が尖る。弁間文は断続的で、一重の界線がめぐる。外縁は低く、圏線がめぐる。胎土は砂質で軟質、赤褐色。A区SK1より出土。この瓦は今回最も多く出土した瓦で、いずれも粘土を笵の中房にまず入れて作瓦する特徴をもつ。(18) を祖型としたと考えられる。

雷文帯付複弁蓮華文軒丸瓦（23）　中房の蓮子数は1＋6と思われる。複弁は大きく、弁間文は小さく細く作る。二重の界線が入り、外縁部はやや歪む。胎土は多孔質でやや軟質、灰黒色。D区基壇外西側瓦層より出土。紀寺式の瓦である。

重圏文軒丸瓦（24）　胎土は砂質、灰色。C区南壁断面整地層より出土。主に難波宮に使用された瓦である。

単弁蓮華文軒丸瓦（25）　中房の蓮子は1＋6と思われる。笵は浅く、内区は1条の界線で画され、外区に小さな珠文がめぐる。外縁面の下半にヘラケズリを施す。胎土は精良で軟質、赤褐色。D区基壇南側階段西脇より出土。

単弁蓮華文軒丸瓦（26）　中房の出は少なく、蓮子は1＋6。接合は、厚手の瓦当部裏面に丸瓦を深く差し込み、補強粘土を多く使う。奈良時代後期の接合法である。胎土は多孔質。D区基壇外西側瓦層より出土。

単弁蓮華文軒丸瓦（27）　中房の蓮子数は不明。三角形の線で表す弁間文が界線に接する。外区は不明。瓦当部裏面に布目痕のある「一本造り」である。丸瓦部凹面に、この瓦独特のトンボのような圧痕が付く。胎土は多孔質。D区基壇南側階段西脇より出土。

六重弧文軒平瓦（28～30）（28・29）は、顎部が剥離しており、平瓦凹面には桶巻作りの痕跡が認められる。胎土は精良で硬質。(30) は、段顎で顎部凸面に特異な文様のタタキを施す。胎土は軟質、黄褐色。(28・29) はA区SK2、(30) はD区基壇外北側瓦層より出土。

偏行忍冬唐草文軒平瓦（31）　唐草文が瓦当面上部から外れており、その下を三重の重弧文で飾る。段顎。平瓦部は桶巻作り。胎土は多孔質。D区基壇外西側瓦層より出土。

均整唐草文軒平瓦（32）　3反転する細い唐草文で、外区、脇区に小粒の珠文を配し、重厚な曲線顎。胎土は砂質で多孔質。D区基壇外北側瓦層より出土。

緑釉均整唐草文軒平瓦（33）　C字対向の中心飾りの左右に3反転半する唐草文が展開する。調整は丁寧である。胎土は緻密で硬質。D区基壇外北側瓦層より出土。栗栖野瓦窯で作られ、主に平安宮に供給された瓦である。北白川廃寺出土の緑釉瓦は、釉がすべて蒸発している。

均整唐草文軒平瓦（34）　笵は浅く、文様が平面的。C字対向の中に中心飾り「＋」字状を配す。唐草文は左右に3反転し、界線の外にやや大粒の珠文がめぐる。狭い曲線顎で、平瓦部凹面の布目は粗く、乱れている。胎土は多孔質で軟質。D区基壇外西側瓦層より出土。

重弁蓮華文軒丸瓦（35）（18）と同笵で作りも同じ。D区基壇外西側瓦層より出土。

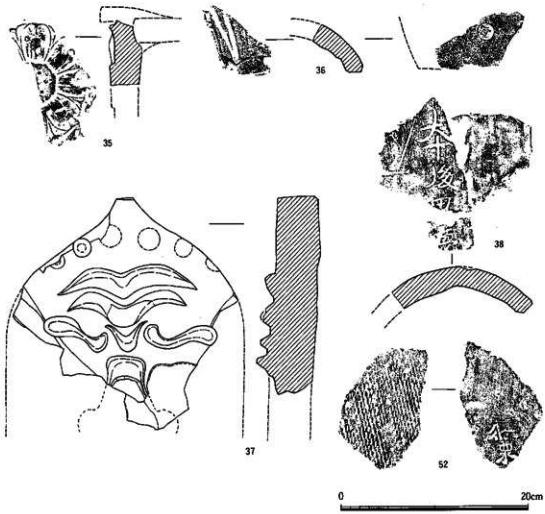


図4　瓦拓影・実測図（1：4）

丸瓦（36）　玉縁部に「官」字の逆字の陽刻「㊝」。栗栖野瓦屋で使用された印である。C区南壁断面整地層より出土。

鬼瓦（37）　頸部の破片。型作り。側面を厚く珠文部までヘラケズリして加工する。胎土は緻密で硬質。D区基壇北側階段西脇より出土。

丸瓦（38）　凸面にヘラ描きの4文字がみられ、「本後□□□」と判読できる。丸瓦の成形技法からみて、平安時代前期と考えられる。A区SK1より出土。

平瓦（39）　凸面にいわゆる日輪文状のタタキをやや粗く施す。凹面に桶巻痕。胎土は砂質で硬質。D区基壇外西側瓦層より出土。

平瓦（40）　凸面に特異な文様のタタキを密に施す。胎土は砂質で多孔質。A区SK2より出土。

平瓦（41）　凸面に特異な文様のタタキを密に施す。胎土は堅緻。A区SK1より出土。

平瓦（42）　凸面に格子目タタキを施す。これまでの北白川廃寺出土の瓦の中にはみられなかった格子目である。胎土は精良、明黄褐色。A区SK2より出土。

平瓦（43）　瓦の隅を小さく斜めに切った加工痕がみられる。凸面の格子目タタキは、従来の

瓦の中で最も細い格子目。胎土は多孔質、黒色。A区ＳＫ２より出土。

平瓦（44） 凸面に平行タタキを全面に施す。胎土に小石を含む。A区ＳＫ２より出土。

平瓦（45） 凸面に数条の線を交差させた文様のタタキを施す。北白川廃寺でしか出土していない人面風叩き文様を有するものである。胎土は堅緻。A区ＳＫ１より出土。

平瓦（46・47） 凸面に（45）と同文のタタキを施す。（46）の凹面に２条のヘラ描きがみられる。胎土は堅緻。A区ＳＫ１より出土。（47）は胎土は緻密で硬質、灰色。A区ＳＫ２より出土。

平瓦（48・49） 凸面に縄目タタキを施す。一枚作りである。胎土は多孔質。（48）はA区ＳＫ２より出土。（49）はA区ＳＫ１より出土。

瓦塼(50) 幅21cm、厚さ３cm。朱の付着がみられる。胎土は多孔質。D区基壇南側階段西脇より出土。

鴟尾（51） 鴟尾背面上部の左側鰭部の破片。残存高40cm、幅14cm、厚さ４cm。胎土にチャート、黒雲母を多く含み、軟質。D区基壇南東部版築土層より出土。

文字瓦（52） 平瓦凹面に「修乘」の陰刻の押印があり、「修乘」であろう。胎土は多孔質、灰黒色。D区基壇外北側瓦層上部より出土。

以上の瓦類を時代別にまとめると、（18～23・28～31・35・39～47・51）が白鳳期、（24～26）が奈良時代、（27・32～34・36～38・48～50・52）が平安時代前期から中期である。 （吉村）

Ｖ まとめ

今回の調査では、基壇の規模は瓦積基壇が一辺13.8m、改築された石積基壇が一辺14.0mであり、残存する高さは平均0.5mであることが判明した。

また、基壇の中央を断割り、基壇外側にトレンチを設けたことで明らかになったことは、基壇中央部は、自然地形を削りだしたうえで上部に版築を行っているが、基壇周縁部は低湿地を埋めたてた後に斜め方向の版築を行い自然地形の不足分を補っている。創建時の瓦積基壇は、三上氏[註5]が指摘しているようにその後、南東角に数度の補修があった。石積に改築した平安時代前期の瓦積基壇は、東方から流入した土砂によって埋まり、地表は西下りになり、瓦積も上部がかなり損傷していたと思われる。本来ならば、再び瓦積の基底部まで掘り返して水平に石を据えるべきところを、地形に沿って傾斜したまま石を据えた結果、石積基底部は東に高く西に低いものになったようである。調査で、瓦積基壇の残り方が西では悪く、東では良好であったのは、以上の理由から推察される。

石積基壇に取り付く南北階段については、最初に南側に幅2.8mの第一次階段が造られ、その後第二次階段として、幅を4.0mに拡幅し、その時にほぼ同規模の北側階段も造ったと考えられる。しかし、階段の取り付く位置に基壇の石積があることから、階段は基壇の石を積み上げた平安時代前期から中期のどの時点で付けられたかは、出土遺物も少なく明らかではない。

基壇の上部構造については、塔心礎は地上式であることが判明した。また、四天柱は検出できず、側柱は、浅く窪んではいたがあまり明確ではなかった。

塔基壇が造られた時期は、版築土層から出土した須恵器や、山田寺式・紀寺式瓦が出土していることから、7世紀後半と考えられる。また、下層遺構の湿地や溝から出土した遺物も塔建立直前の時期を示す資料であり、今後の検討課題としたい。瓦積から石積基壇に改築された時期は、石積基壇の基底部から出土した須恵器から9世紀前半と考えられる。さらに、塔が廃絶ないしは衰退した時期は、塔の外側を埋めた瓦層から出土した土師器皿から、12～13世紀と判断できる。

今回調査した塔跡と建立時期が近く、規模・構造が似ている塔としては、奈良県法隆寺の一辺13.6mの五重塔、滋賀県雪野寺跡[註9]の一辺14.0mの塔跡があり、塔心礎は、法隆寺が地下式、雪野寺跡が地上式である。また、地山を削りだして基壇を造る工法は、雪野寺跡の塔跡、滋賀県衣川廃寺[註10]などにみられ、後者の金堂跡は、今回と同じく上部に版築土層が残存している。これらのことから、雪野寺跡の塔跡が最も北白川廃寺塔跡と規模・構造が似ている。

北白川廃寺では、主要遺構として塔と金堂（東方堂宇）および回廊が発見されているにすぎず、その伽藍配置についても、塔と金堂の中軸線の東西距離が約103mと離れているなど疑問点が多く、今後の調査で解明すべき課題は多いといえる。

最後に、北部山城地域で、白鳳期の古代寺院で基壇などの遺構が残っているのは、樫原廃寺の八角塔、八坂法観寺の塔心礎などその数はきわめて少なく、北白川廃寺塔跡も永く保護されることが強く望まれる。

なお、調査後の塔跡については、重要遺構であることを理解していただいた土地所有者である西村四郎氏の御意向により、埋め戻しを行って保存し、現在は駐車場として使用されている。

（吉村）

註1　梶川敏夫「北白川廃寺塔跡第2次発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団　1976

註2　石田志朗・竹村恵二「第2章北白川追分町遺跡の堆積環境の変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』京都大学埋蔵文化財研究センター　1985

註3　梅原末治「北白川廃寺趾」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第19冊　京都府　1939

註4　梶川敏夫「北白川廃寺緊急発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団　1976

註5　三上貞二・山口　博「北白川廃寺塔跡第1次発掘調査概要」『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』北白川廃寺発掘調査団　1976

註6　辻　純一「北白川廃寺発掘調査概報　昭和55年度」京都市埋蔵文化財調査センター　1981

註7　網　伸也「北白川廃寺2」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』㈶京都市埋蔵文化財研究所　1994

註8　1995年度立会調査　未報告

註9　岡村秀典他「滋賀県雪野寺跡発掘調査の概要」『塑像出土古代寺院の総合的研究』京都大学文学部考古学研究室　1992

註10　大津市教育委員会の福田　敬氏より御教示を受けた。

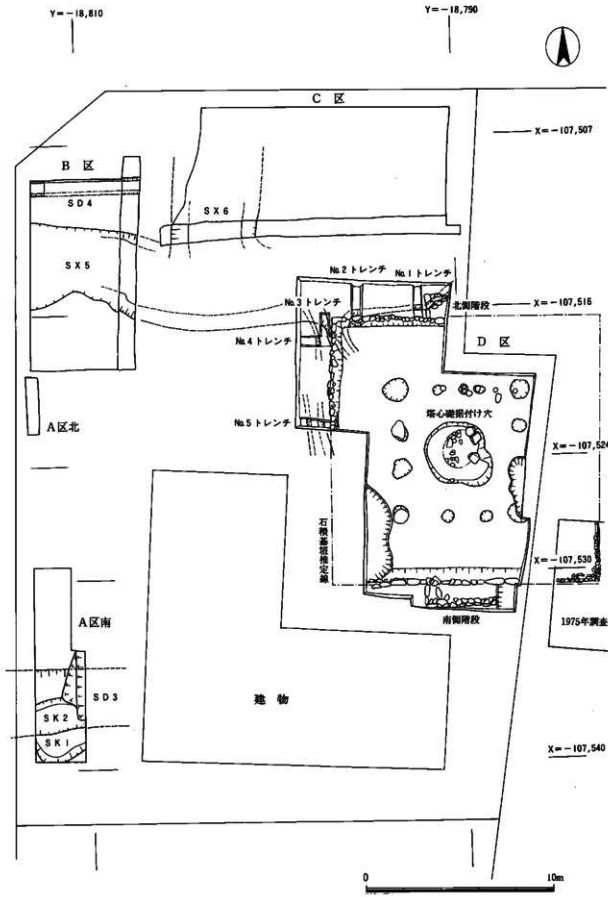
報告書抄録

ふ り が な	きょうとしないいせきはっくつちょうさがいほう
書　　名	京都市内遺跡発掘調査概報　平成７年度
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	吉村正親・伊藤　潔・本　弥八郎・北川和子・近藤章子・端　美和子・宮下則子
編 集 機 関	財京都市埋蔵文化財研究所
所 在 地	〒602　京都市上京区今出川通大宮東入る元伊佐町265-1　TEL075-415-0521
発 行 機 関	京都市文化市民局
所 在 地	〒604　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL075-222-3108
発 行 年 月 日	西暦1996年３月31日

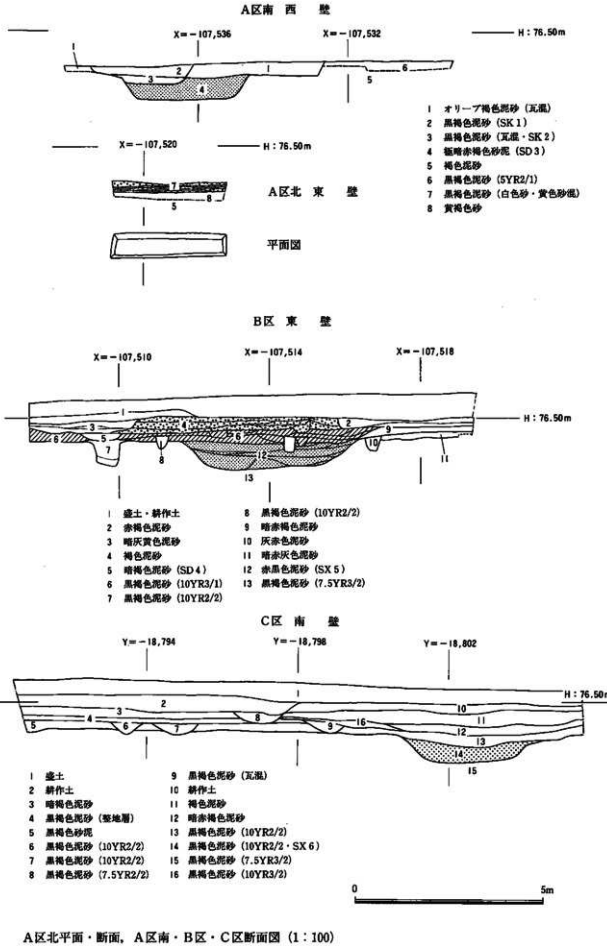
所収遺跡名	所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北白川廃寺跡（きたしらかわはいじあと）	京都府京都市左京区（けいとふきょうとしさきょうく）北白川東瀬ノ内町（きたしらかわひがしせのうちまち）	26100		35度１分50秒	135度47分39秒	1995.5.10～9.20	413	マンション

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北白川廃寺跡	寺院	白鳳～平安	塔跡	瓦類・土器類・釘	地上式心礎・基壇改築

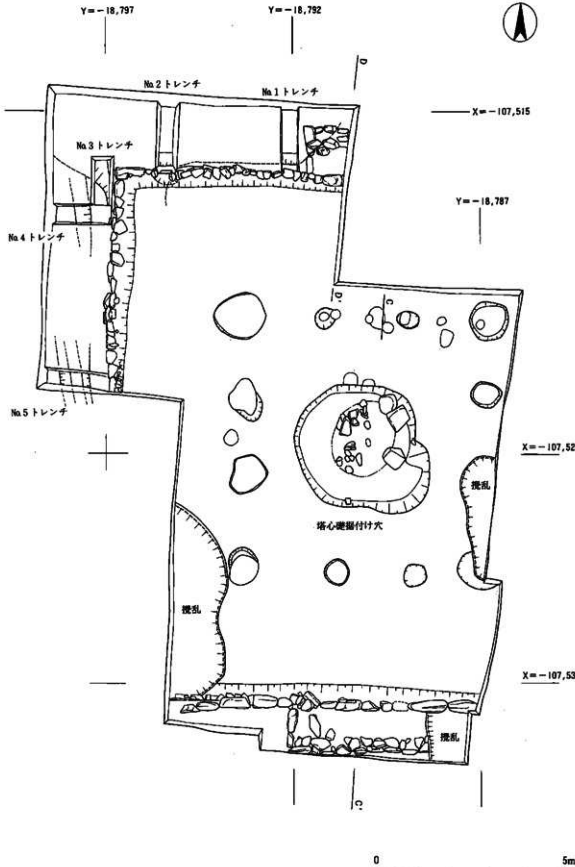
図　　版


Y=−18,810
Y=−18,790
C 区
X=−107,507
B 区
SD4
SX6
SX5
No.2トレンチ
No.1トレンチ
No.3トレンチ
北側階段
X=−107,515
No.4トレンチ
D 区
A区北
No.5トレンチ
塔心礎据付け穴
X=−107,524
石敷基礎推定線
X=−107,530
A区南
南側階段
1975年調査
SD3
建 物
SK2
SK1
X=−107,540
0
10m

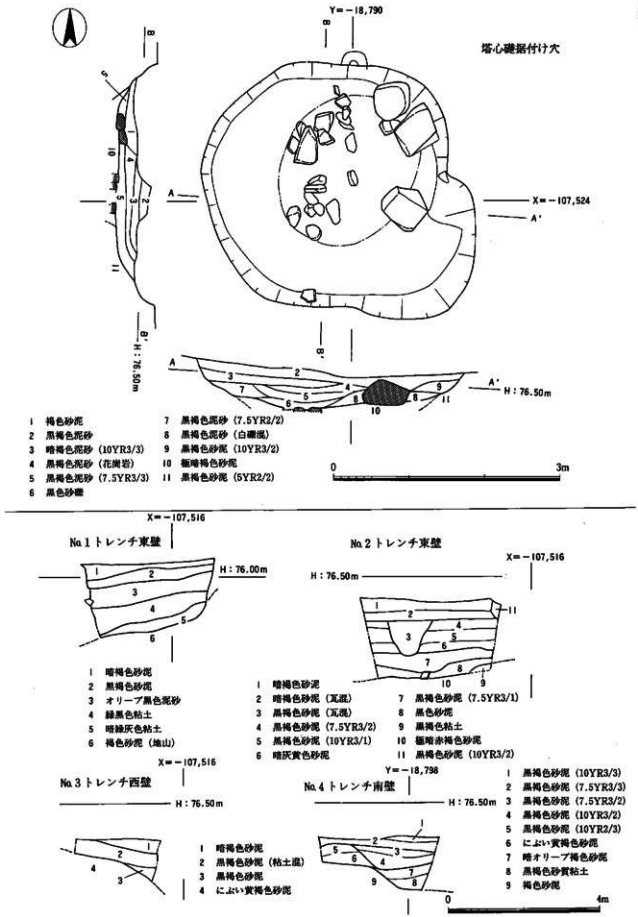
調査区配置図（1：200）



A区北平面・断面，A区南・B区・C区断面図（1：100）


Y=−18,797
Y=−18,792
No.2 トレンチ
No.1 トレンチ
X=−107,515
No.3 トレンチ
Y=−18,787
No.4 トレンチ
No.5 トレンチ
X=−107,524
撹乱
塔心礎掘付け穴
撹乱
X=−107,530
撹乱
0
5m

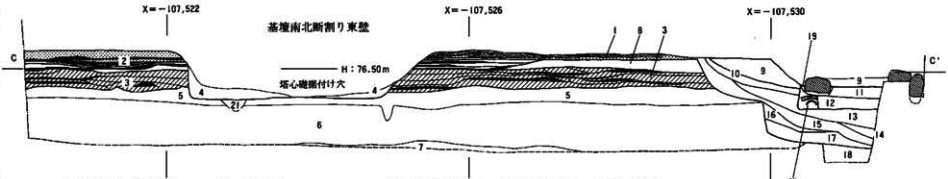
D区平面図（1：100）



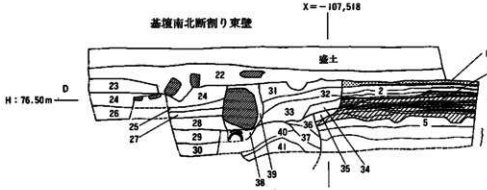
塔心礎据付け穴平面・断面図（1：50）No.1～4トレンチ断面図（1：100）

遺構

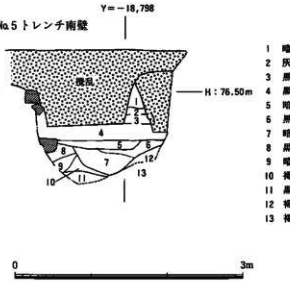
基壇南北断割り・No.5トレンチ断面図（1：50）



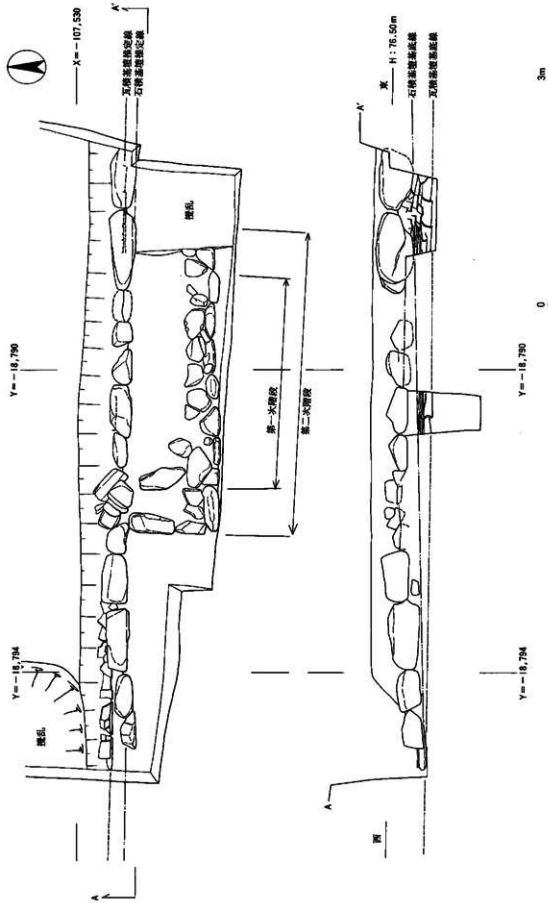
1 黄褐色泥砂（白川砂混）
2 黒色泥砂
3 黒褐色砂泥＋にぶい褐色泥砂
4 暗褐色泥砂（花崗岩混）
5 暗褐色泥砂（縄文の包含層）
6 にぶい黄褐色泥砂
7 黒褐色泥砂
8 灰黄褐色泥砂（白粘土混）
9 黒褐色泥砂（5YR2/1）
10 黒褐色泥砂（黄色ブロック混）
11 黒褐色泥砂（10YR2/2）
12 黒褐色泥砂（7.5YR3/2）
13 黒色泥砂（黄色ブロック混・7.5YR2/1）
14 黒色泥砂
15 黒色泥砂（黄色ブロック混・10YR2/1）
16 黒褐色泥砂（黄色ブロック混）
17 黒色砂泥
18 にぶい黄褐色泥砂
19 褐灰色泥砂
20 灰色泥砂
21 黒褐色泥砂（石と瓦）
石



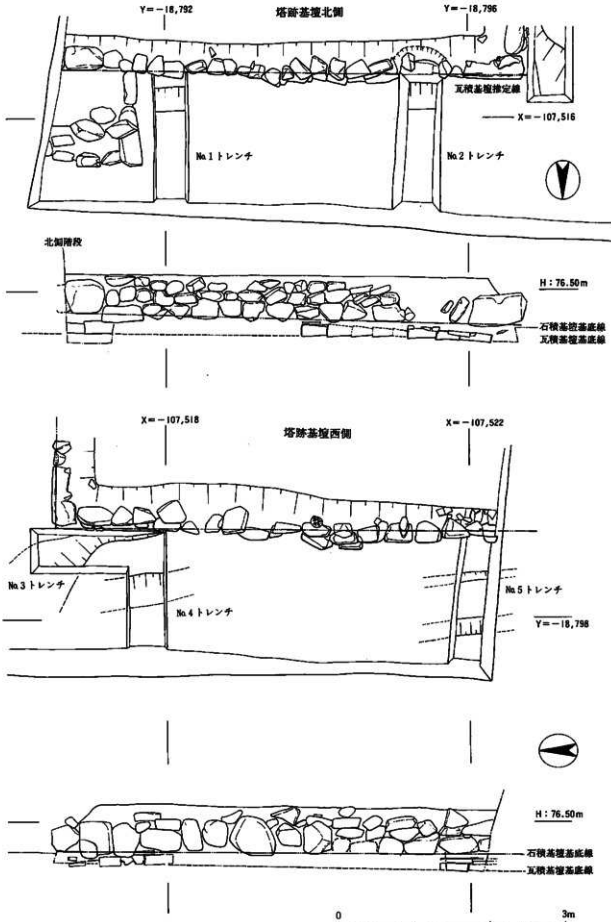
22 耕作土
23 暗褐色泥砂
24 暗灰黄色泥砂
25 黒褐色砂泥
26 灰黄褐色砂泥
27 黒褐色泥砂
28 褐色泥砂（瓦混）
29 黒褐色砂泥（7.5YR3/2）
30 黒褐色砂泥（10YR3/2）
31 黒褐色砂泥（7.5YR3/2）
32 黒褐色砂泥（5YR3/1）
33 黒褐色泥砂（砂混）
34 暗赤褐色砂泥
35 黒褐色泥砂（5YR2/2）
36 褐色砂（7.5YR4/4）
37 褐色砂（10YR4/6）
38 瓦検基壇裏込め
39 石検基壇裏込め
40 褐色泥砂（7.5YR4/4）
41 暗褐色砂泥



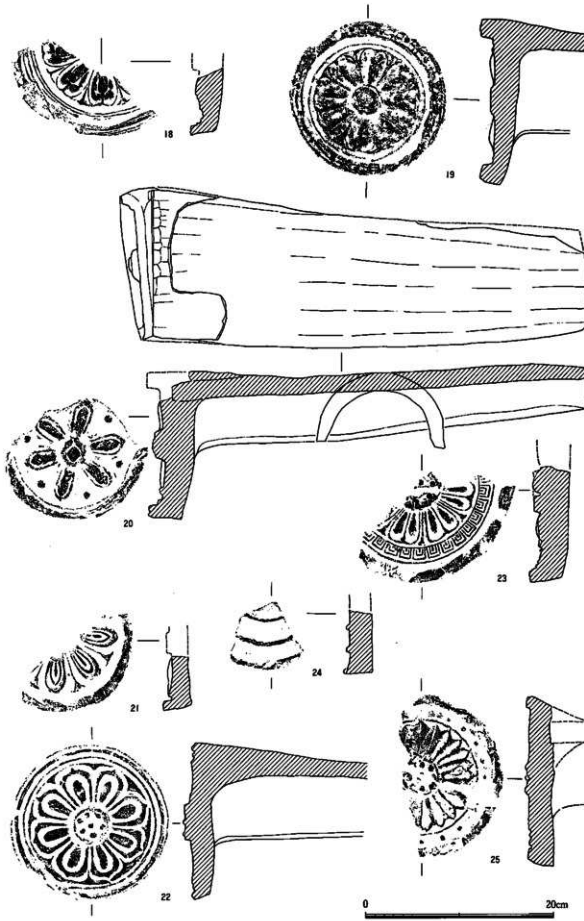
1 暗褐色泥砂
2 灰黄褐色泥砂
3 黒褐色砂泥（10YR3/2）
4 黒褐色砂泥（7.5YR3/2）
5 暗褐色砂泥（10YR3/3）
6 黒褐色砂泥（10YR2/3）
7 暗褐色砂泥（7.5YR3/3）
8 黒褐色砂泥（10YR3/2）
9 暗褐色砂泥（7.5YR3/4）
10 褐色泥砂
11 黒褐色砂泥（10YR2/2）
12 褐色砂泥（10YR4/6）
13 褐色砂泥（10YR4/4）



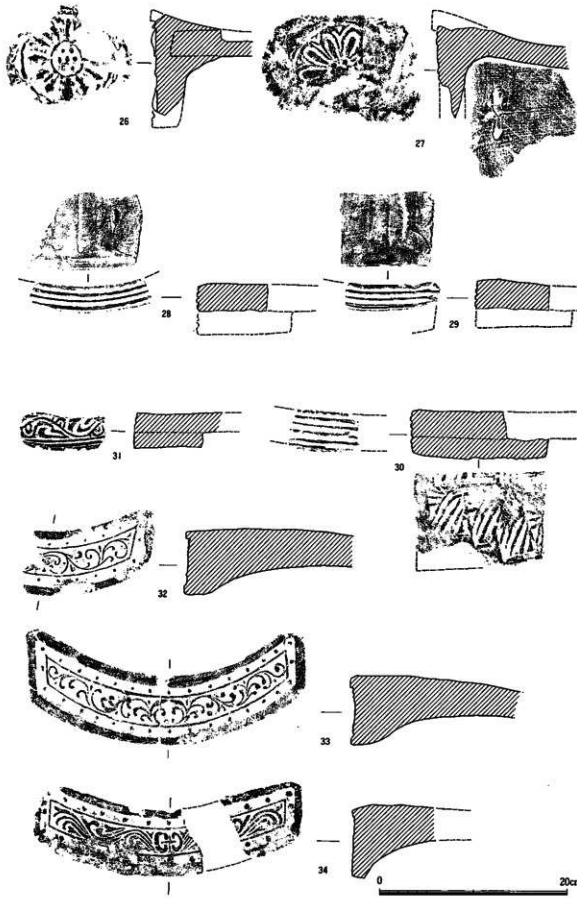
基壇南側階段平面・立面図（1：50）



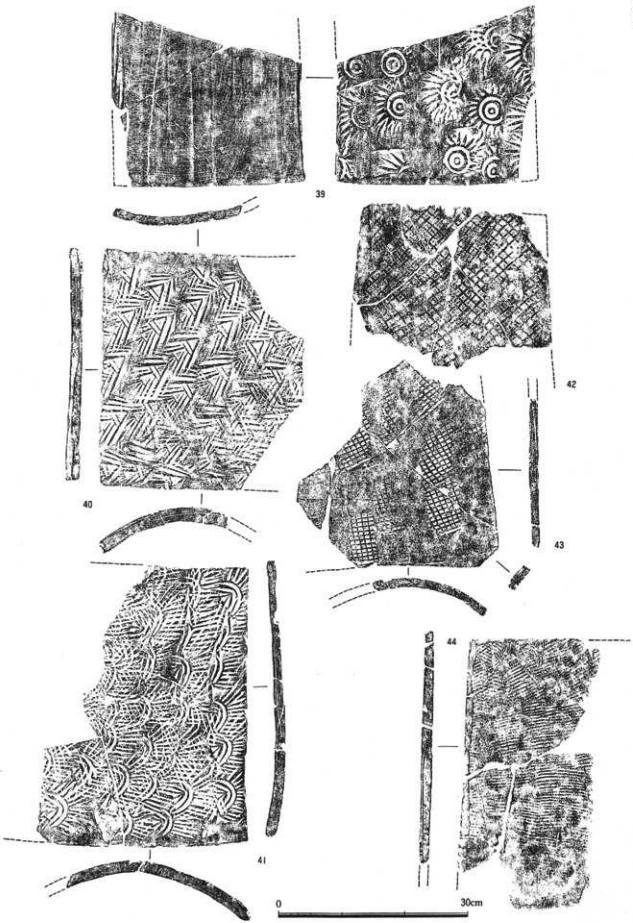
基壇北・西側平面・立面図（1：50）



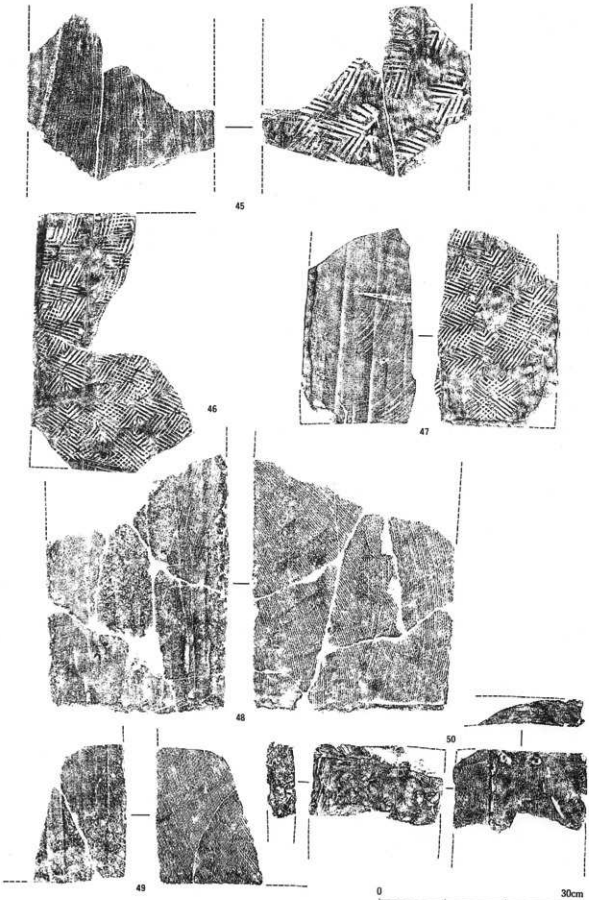
軒丸瓦拓影・実測図（1：4）



軒丸・軒平瓦拓影・実測図（1：4）



平瓦拓影図（1：6）

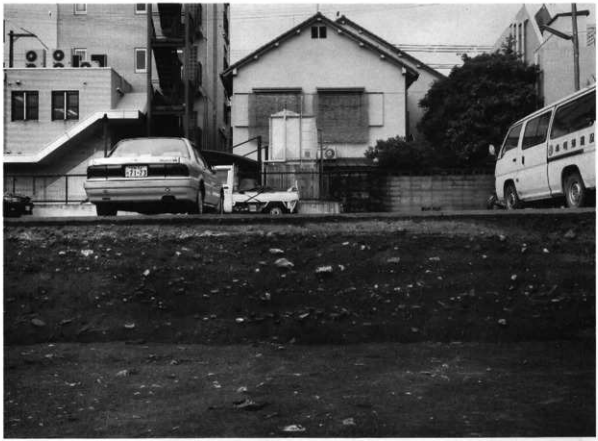


平瓦・塼拓影図（1：6）

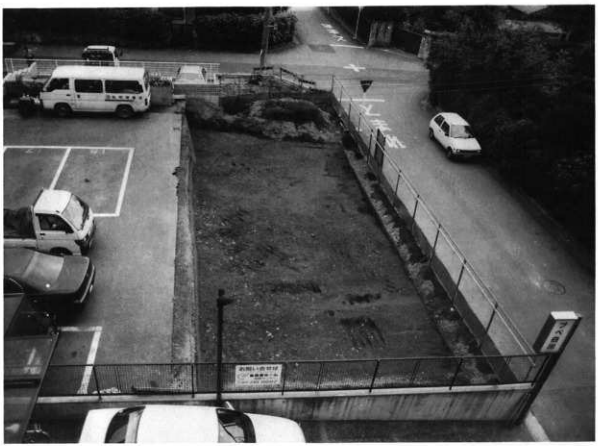
1　調査区全景（北から）

2　土壙ＳＫ１（北西から）

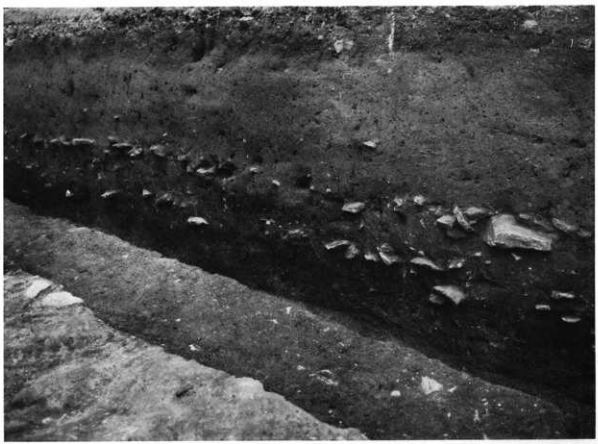
1　調査区全景（西から）



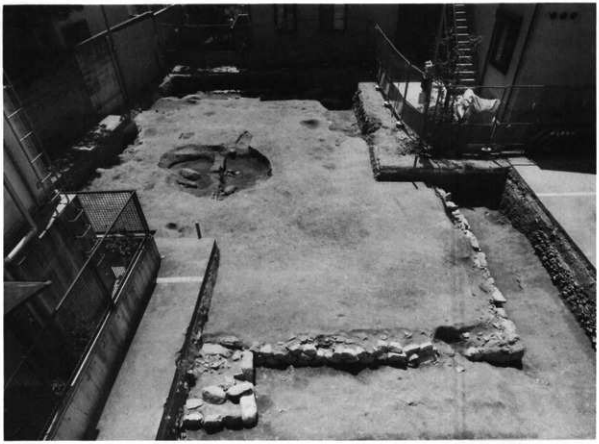
2　東壁断面（西から）



1　調査区全景（東から）

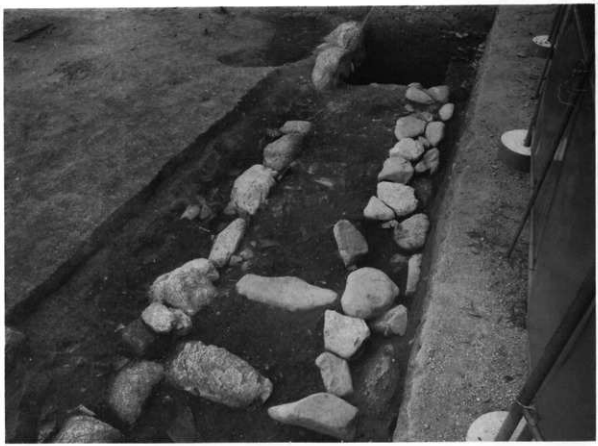


2　南壁断面（北西から）



1　調査区全景（北から）

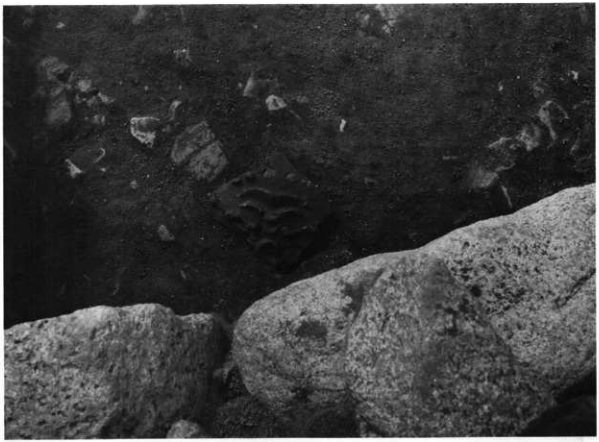
2　石積基壇（北西から）



1　基壇南側階段（西から）

2　基壇南側階段西脇（西から）

1　基壇北側階段（北西から）



2　基壇北側階段西脇　鬼瓦出土状況（東から）

1　塔心礎据付け穴（西から）

2　塔心礎部南北断割り断面（西から）

1　基壇北側 石積と瓦積（北から）

2　基壇中央部南北断割り断面（北西から）

1　塔心礎部北側断割り断面（西から）

2　塔心礎部南側断割り断面（西から）

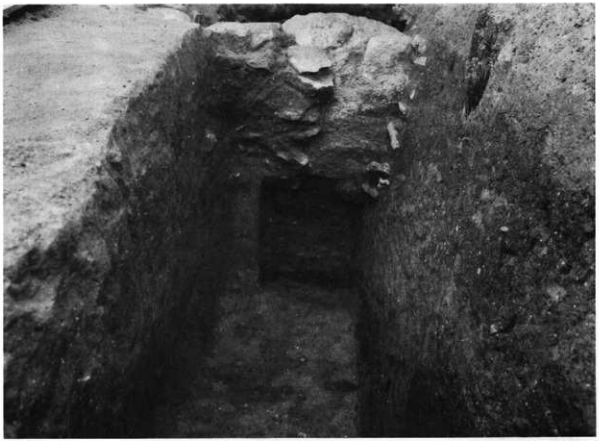
1　No.1トレンチ東壁断面（南西から）

2　No.4トレンチ南壁断面（北から）

1　基壇南側東端（南から）

2　基壇北側西端（北から）

1　基壇西側 石積と瓦積（西から）



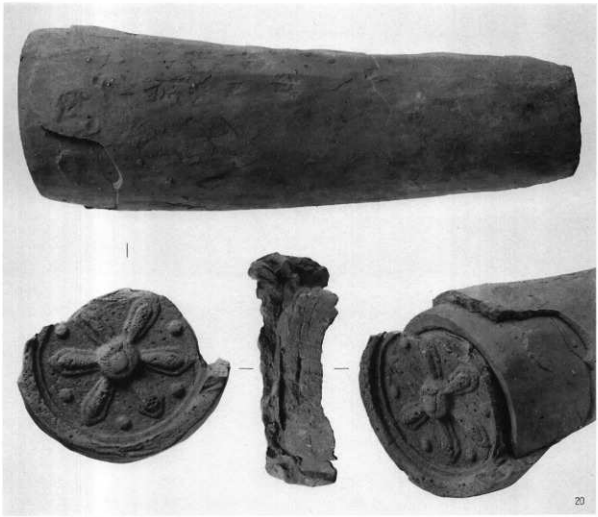
2　基壇南側 裏込め（北から）

1　基壇断面剥ぎ取り作業風景（南西から）

2　遺構保護作業風景（北から）

軒丸瓦　A区　土壙ＳＫ１(18・19・21・22)，Ｄ区　基壇外西側瓦層(23・26)，基壇外南側階段西脇(25)，丸(文字)瓦　A区　ＳＫ１(38)

軒平瓦　A区　土壙ＳＫ２(28)，D区　基壇外北側瓦層(30・32・33)，基壇外西側瓦層(31・34)



軒丸瓦　A区　土壙ＳＫ２(20)，鬼瓦　D区　基壇北側階段西脇(37)，鴟尾　D区　基壇版築(51)

京都市内遺跡発掘調査概報

平成７年度

発行日　平成8年３月31日

発　行　京都市文化市民局

住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

編　集　㈶京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出大宮東入元伊佐町265-1

TEL (075) 415-0521

印　刷　真　陽　社